

＜書評＞

倪卉 著

『蚕糸と現代中国』（京都大学学術出版社、2016年）

陳慕薇

本書は著者が2005～2014年までに中国で行った現地調査を基に、二つの課題が設定されている。一つは、1980年代以降養蚕業と製糸業の発展状況を振り返ることによって、中国における蚕糸業の生産構造の変化を究明することである。もう一つは計画経済から市場経済への移行に対応して、農業生産責任制の下での養蚕農民の再組織化である。

先行研究は日本の蚕糸業に関する代表的な研究から始まる。山田盛太郎の『日本資本主義分析—日本資本主義における再生産過程把握』と山田勝次郎の『米と繭の経済構造』の研究を踏まえたうえで、著者は蚕糸業の地域性に注目する。続いて、中国の蚕糸業に関する日中両国の研究を紹介し、蚕糸業の地域性は蚕糸業の生産構造の変化ならびに地域間の構造再編を伴っているとまとめている。その上で、生産連関上および地域連関上の大きな構造変化に関する研究が不足であると指摘する。

また著者は、アグリビジネス論の分析視角を取り入れる。G. Gereffiの商品連鎖(コモディティーチェーン)に基づいて、蚕糸業は養蚕業、製糸業、絹織業というように農業から工業へとつながっている産業であると強調する。W. Friedlandが提起した8つの商品システム分析を転用して、中国蚕糸業を分析するために、自然地理状況、政策環境、生産方式と龍頭企業の役割、農民の反応と農民組織の形成という4つのシステムに重点を置く。そして、L. Buschのアクターネットワーク理論を再組織化の理論ベースとする。一方、アグリビジネス論の中国での応用は龍頭企業と契約農業「訂単農業」である。その背景は1980年初頭農業生産責任制であり、その過程において、国営企業であった龍頭企業が民営化され、土地制度は集団所有ないし国家所有になっていった。以下、本書の章別構成について述べる。

第一章から第三章は養蚕業を中心に、蚕糸業の全体像と地域性の形成が論じられている。まず、養蚕業の地域性が形成された背景に繭価格の双軌制と2回にわたる「繭大戦」があると指摘する。双軌制とは国家が定めた価格以外、市場価格も同時進行するという制度である。そして、1987年春から1988

年までの第一次「繭大戦」により、蚕糸業は1987年中国糸綢進出口会社に一括管理されるようになった。1994年から1995年までの第二次「繭大戦」を通して、養蚕農民と製糸工場の間の連携が薄く、コモディティーチェーンが形成されていないという問題が浮き彫りになった。その結果、1996年10月「繭糸綢集团公司」が設立され、それによって龍頭企業による「貿工農一体化」が図られた。また、1997年製糸工場の生産許可証(准産証)制度が実行された。以上の過程を経て、主要養蚕地域では地域に基づく蚕糸業のコモディティーチェーンが促進され、地域の特徴が次第に現れてきたと述べる。

続く産地分布と産地移動の部分では、1990年代以降桑園と養蚕業は四川、浙江、江蘇三省から広西、雲南へ移動していく傾向が紹介されている。ただし、製糸とシルク織物の生産は依然として浙江と江蘇に集中している。広西は伝統産地への繭原料提供地になっている。移動の原因を6つ挙げているが、龍頭企業の地域によって違う性格、農民組織の形成、国際貿易構造の変化の3つが強調されている。

第四章と第五章は伝統産地の興衰が書かれている。まず、桑栽培は農業生産責任制に伴い、桑園が零細化・分散化した。その結果連担桑園面積が激減し、桑園生産性が低下した。養蚕は蚕種選定と技術指導において蚕種場の役割が大きく、自育率が高い。蚕種の流通は指導駅の所轄地域で区切られていて、閉鎖される構造になっている。繭の流通は主に繭会社と糸綢会社が行っている。しかし、会社によって繭生産領域が分断され、地方保護主義が芽生えてしまう。

また養蚕減少の原因について、農産物と工業による環境汚染、養蚕収益の不安定、労働力不足と技術指導員の不足、龍頭企業のコントロール、「西部大開発」と「東桑西移」の政府政策という5つが挙げられている。

第六章と第七章は新興産地の蚕糸業をコモディティーチェーンの部分ごとに説明している。桑園の面積は広く、空間的に連続しているが、利用率が低い。蚕の共同飼育率が高く、新種開発が行われている。繭の生産と流通について、繭站が重要な存在である。個人所有の小規模繭站と糸綢会社が投資した大規模繭站と2種類がある。それ以外に、生繭の仲買人と、インターネット販売を行う広西大宗繭糸交易市场有限責任会社も繭の流通に大きな役割を

果たしていると著者は指摘する。また、製糸業の発展が遅く、地域的に不均衡が見られ、蚕糸業の産業化は製糸業までに留まっているため、「不完全な産業化」と指摘している。さらに、広西蚕糸業の発展要因について、養蚕業に適した地理と気候条件、桑が換金作物としての優越性、広西政府の奨励政策及び技術研究開発部門としての指導駅の役割、龍頭企業のリーダー機能の発揮及び農民の再組織化の促進という 4 つにまとめている。

本書は地道なフィールドワークによって集められた詳細かつ膨大な第一次資料に基づいて、養蚕業を中心に、伝統産地と新興産地の蚕糸業の全体像を示している。とりわけ、マクロ経済環境や蚕糸業関連の政策変化への業界の対応に関しては、養蚕農民、龍頭企業、指導駅など各アクターを網羅して分析しているだけでなく、各産地は試行錯誤しながら、地域性に合わせた健全なる発展を遂げようと努力している様子を描いている。本書の 1980 年代以降、中国蚕糸業の伝統産地の衰退と新興産地の発展を全面的に把握する点は評価されるべきである。

ただし、豊富な素材を抱えているにもかかわらず、その組み合わせ方によって論点がはっきりしていなかったり、分析が不十分であったりする点がある。以下、4 つの点を指摘しておく。

第一に、本書の第二の課題である「農業生産責任制下の農民の再組織化」に関する分析は若干不十分である。新興産地で現れた農民の自発的な組織はまだ調査されていないが、伝統産地における龍頭企業、指導駅による農民の再組織化についてのヒアリングがたくさん行われた。しかし、龍頭企業と指導駅の活動内容については情報提供が多く、それぞれ農民の再組織化における役割と農民とのかかわりの比較など整理された分析が欠けている。むしろ、ヒアリング内容を表象の叙述に留めずに、それを生み出した要因、形成のメカニズム、その結果と影響まで掘り下げていく必要があると評者は考える。この不足点は伝統産地と新興産地の比較でも表れている。終章では両産地を 8 つの面において比較して、表にまとめている。しかし、前章の伝統産地と新興産地の各部分での内容のまとめであり、重複しているという印象を抱く。その相違点はどこから生まれたものであるのか、なぜ違うのか、その違いによって農民を含む養蚕業のこれからへの影響は何かといった分析まで昇華すれば、より研究意義と独創性が際立つ

と思う。また、それは先行研究のアグリビジネス論への理論的補完も期待できるであろう。

第二に、両地域の紹介（第四章と第六章）とヒアリング（第五章と第七章）の記録を別々にする書き方は重複する記述が見られる一方、最初に紹介部分を読むと、ヒアリングの具体例がなければ、指導駅、蚕種場、龍頭企業などの固有名詞の具体像が湧きにくい。この点は実は第一点と関連している。例えば、第六章では新興産地発展の原因が書かれているが、それは第七章の広西蚕業技術指導総站へのヒアリングで提示されている広西で養蚕業を行う有利点である。つまり、著者が分析した結果というより、ヒアリングで得られた情報である。

第三に、各部分では、養蚕業、製糸業、絹織業の分別がはっきりとしていなく、章と節の分割の仕方に違和感がある。それは編集の時に、十分にチェックができなかったことが原因だと考えられる。例えば、第四章「伝統産地の興衰」の第一節をみると、「養蚕業および製糸業の生産状況」と「養蚕業および製糸業の生産と流通状況」という二つの部分からなっている。業種別に行っているのか、それとも生産と流通を別々に書いているのかと読者を困惑させてしまう可能性がある。また前半に桑の栽培と蚕種生産・流通が含まれているに対し、後半に繭の流通と製糸業が書かれている。前半の第二の部分では「養蚕生産と繭の流通」をテーマにしながら、繭の流通に関する内容はなく、後半の第一部分で書かれている。そうすると、繭の生産と流通は養蚕業に入っているのか、という混乱させやすい書き方になってしまう。さらに、後半だけをみると、まず繭の流通の 4 つの流通方式を 7 ページに渡り詳細に紹介している。それに対して、残りの部分では繭価格と品質に関する問題点を提示し、それによって製糸企業が受けた影響が分析されている。それは三つの節にわけて、合わせて 6 ページという風に、興味深い論点が提出されているのに、あまりにも細分化したせいで、論点がぼんやりしていて、各節の関連性が欠けてしまう。

最後に、本書には指導駅、龍頭企業といった固有名詞以外、類似している名詞もたくさんある。例えば、蚕糸業とシルク産業、シルク織物と絹織物、製糸企業と糸網公司等。蚕糸業に詳しくない読者が読むと、混乱しやすく、進みにくい。名詞の説明と読み方が付け加えておくことを勧めたい。

(京都大学大学院経済学研究科 博士後期課程)